

ホトトギス

二月号

ホトトギス

昭和二十一年三月二十日発行
明治十七年三月十日創刊
昭和十九年一月一日創刊
昭和二十一年二月二十日発行
第一号



俳句随想 〔二百九十六〕

汀子

俳句は短い詩である。五七五、十七音でどれほどのことが一言い得るであろうか。言葉の選択、言わないことで深くなる余韻。さまざまな工夫がされるわけである。日本語は実に表現が豊富で、同じことでも様々なニュアンスの違いを含んでいる。寒さ一つにしても季題が沢山ある。秋になって空気が冷える」と「冷やか」秋が深まると「やや寒」「うそ寒」「肌寒」「朝寒」「夜寒」「冷まじ」「そぞろ寒」「身に入む」「露寒」がある。十二月には「寒さ」「冷たし」がある。季題に語らせるのが俳句の大きな特徴であるが、季題以外の言葉の表現は何でもいいのであろうか。私は俳句は短い詩であるから一句を読み上げた時に後味が良いということが大事なのではないかと思っている。最近、次のような句があった。「転がして去年今年なく母拭ふ」という句である。伝統俳句系以外の選者が選んでいるのであったが、私はこの句の上五の表現に胸を痛めた。介護をしている人と分る。「転がして」は人に使う表現ではないのではないかと悲しくなった。

旬日記 汀子

平成十八年二月一日 ロイヤル俳壇

朝の雨二月はじまる水曜日
降りつゝの雨に二月の大地かな
針供養針に縁なき衆生とて
濡れて着くホテル二月の雨脱ぎて

二月四日 芦屋ホトギス会

一つづつ行事終へつつ春立ちぬ
二月五日 関西野分会

過ぎるもの風の如くに春立ちぬ
立春といふ明るさはまぎれなく
立春や鳥の来てゐる朝の庭

二月五日 下萌句会

凍ほどけ季節は又もあともどり
体調を問うてあしこと猫柳
白魚の汁椀ほのと湯気立つる
凍解けし水面に風の走りけり

二月五日 悼 吉村ひさ志様

よく耐へて来られし命冴返る

二月六日 ロイヤル俳壇

朝の雪二月六日の月曜日
ホテルより二月の雪を見てをりぬ
山菜 莢の花の粒々空に置く

二月九日 清交社

あさつての余寒なきこと願ひつつ
くぐり戸の出来黄梅の庭つなぐ

下萌や迫り来る日に備へ来し
手抜かりのなきことせめて余寒かな
挿き清められし庭面にある余寒

二月十四日 大阪倶楽部

盛会や二月礼者の心もて
又今日も雪崩注意の布令走る
肩の荷を下ろして二月礼者かな
冴返る心遣ひに執しけり
雪崩かも知れぬ音より夜明けたり

二月十四日 綿業倶楽部

今日も又雪間ふえゆく山居かな
チヨコ食べてバレンタインの日と記憶
雪間にも鳥の来てをりついばめる
雪間あり隣の雪間つながらりて
はじまりは大樹の雪間なりしかな

二月十五日 夏潮句会

残雪の富士の所在も旅のもの
紅梅の雨にさそはれゆく開花
春雨に濡れ一杯のコーヒーよ
祝の雨梅をほどきて止まざりし
春雨に滲みはじめし案内図

二月十七日 工業倶楽部

残雪といへぬまだまだ雪卸
誘はれて外題は知らず二の替
寒明といふ心には折目あり
残雪を卸ろして来しと越の僧
残雪といふも搔かねばならぬ高

二月二十日 関西こんな人あんな人

肩の荷を降ろしてよりの二の替
百人の心集へば梅椿

二月二十一日 有恒倶楽部

冴返る雨に家居の心あり
猫柳水辺輝きゐるところ
薄氷に指一本の自由あり
水音の中に薄氷ありにけり
影置きて午後の明るさ猫柳
午後よりの天気占ふ猫柳
朝の間の動きとどめず薄氷

二月二十一日 無名会

梅固し紅白の色明かさざる
朝の間の余寒忘れてをりしかな
残されし今日の稿債余寒かな
計画の大雑把なり梅白し
引きずりて余寒に對しをりにけり
紅梅の香に気づきたる朝の窓

二月二十三日 きとらぎ会

踏まれても踏まれてもなほ下萌ゆる
薄氷をほどく光と影の中
暖かきことは今日まで旅支度
下萌の庭へくぐり戸開け置くも

二月二十四日 時雨句会

冴返る雨降りはじめたることも
雨つゝのり来て冴返る夕べかな
花束に春めく祝の心かな
冴返るさらに雨又風押しして

二月二十六日 野分会

雨降つて所在失せたるいぬふぐり
この道の季節の証いぬふぐり
立春と思へば軽き身のこなし
この道は必ず通る犬ふぐり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年一月一日 一水会

君の過去吹雪の中に消えてゆく

二月二日 蕉心会

蕉像も碧梧桐忌を修せしか

春隣君が隣に居ればなほ

街を行くコートブーツに網タイツ

都鳥風になりゆく白さかな

さあ今日もうがひ節分前夜祭

水温み初めたる水尾の長さかな

又芭蕉動く話や春隣

この有楽侘助といふ思ひ出も

二月六日 はせを句会

舩挿して湖面に楽の生れたる

忌心を重ねて獺の祭かな

皆二月礼者の顔で臨みけり

上州に思ひ出重ね冴返る

二月九日 土筆会

悼むごと芝公園の梅固し

上州に友失ひて春寒し

残雪を越え残雪を越え通夜へ

梯はこの春寒とともにあり

二月十一日 分散小句会五つの輪

里山といふ六甲の凍ゆるむ

二月十三日 朝日カルチャー若草句会

猫の目の爛々として春立ちぬ

二月十六日 登高会

釣り上げし鱈刃を向けてをり

大雪崩一山景を失へり

神よりも雪崩畏るる国であり

紅梅に虚子を偲べば幹もまた

紅梅の香も色づいてをりにけり

今日鱈ええの入つてまんねんで

太陽に鱈弾けて鱈出づ

春寒きこと都心にも故郷にも

春寒の太陽小さく描く子かな

いややわああんさん京菜言ははつて

春寒を覚ゆ鱈鱈の歩みとも

二月二十日 目黒学園句会

恋猫や昨日振られし僕の膝

蒟蒻のふるふるると針供養かな

早春や今日も愛猫帰らざる

針供養世界遺産を指呼にして

紀ノ川の風も加はり針供養

恋猫にバレンタインも辟易す

針供養香煙いよよ紫に

二月二十八日 若水会吟行句会第一日

梅の香に誘はるるままわかれ道

梅林といふ幕山を拒む距離

紅白といふ山笑ひ初むる色

白梅に発ち紅梅に消ゆる風

二月七日 吉村ひさ志様句會

二月二十二日 草木瓜会

雑詠

廣太郎 選

さみだれてをり昼となく夜となく
 雨を得てこそその七変化の仔細
 梅雨晴の風に重さのまだ残り
 風は秋西への旅も良からんと
 秋の雲わが命運の流れ行く
 露の世に憚り生きて悔いもなし
 先師をも共に祀りて獺祭忌
 大雷雨ありたる昨夜の夢現
 日傘もういらぬ句会に急ぎけり
 秋時雨またあきしぐれ山の黙
 霧錆びて猪田古宮の天狗杉
 天つ神国つ神にも蚯蚓鳴く
 朝の日に光わたして月白し
 桜島手繰りはじめし罽雲
 東奔も西走も日々爽やかに
 吾亦紅から沈みゆく野の暮色
 邯鄲や闇さまよへるものの声
 犀川の月にとどろく瀬音かな

神戸 保田 晃

同

同

秋田 浅利恵子

同

たつの 浅井青陽子

同

同

樺原 稲岡 長

同

同

長岡 安原 葉

同

同

神戸 長山あや

同

同

同

露けしや僧はただ掃き道均す
 あちこちに電子辞書鳴り子規祀る
 コスモスの風が出口を探しゐる
 枕辺を飾りて呉れし思草
 病床のつれづれに吹き瓢の笛
 金木犀盛りと庭の便りきく
 放されし鳩一直線放生会
 放生の鯉子を池に稚児並び
 露店の灯点る人波放生会
 三十人今宵かうもり棲む寺に
 読み書きのわが窓を葛咲き隠し
 早百年糸瓜の陰に身を隠し
 柿食へば子規の健啖せつなかり
 秋蝶のシャッター通り低く飛ぶ
 棟梁のああせよかうせよ秋団扇
 葉月潮寄す三角形 三角形
 見たくなきものにも興味鳴の贅
 選扱は磴 又は坂 秋の雨
 澄む水にオール静かにすべらせて
 漕ぎ出せば風の生まれて秋の湖
 まつすぐに降りそそぐ雨曼珠沙華
 天心の雲に嵐の月明り
 峙てる雲より現れて望の月
 隠す雲立待月に去りにけり

八尾 岩垣子鹿

同

同

姫路 桑田青虎

同

同

福岡 松尾緑富

同

同

東村山 村松紅花

同

同

東京 内藤呈念

同

同

香川 湯川 雅

同

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

同

米子 中村襄介

同

同

雑詠句評（一月号より）

葉　　・むつみ・静　龍
憲明・保佳・芳子
美奇・千鶴子・明　倫
中正・廣太郎

夕暮を惜むごとくに秋の蟬　東京　川口利夫

蟬は春蟬、松蟬からはじまって、夏本番の蟬、油蟬蟬やみんみん蟬など賑やかであるが、秋に入れば蛸や法師蟬など、総じて秋の蟬と呼ばれる蟬の鳴き声には、いかにも秋らしい季節の心持が感じられる。掲句は夕暮どきに秋の蟬が鳴いている情景を捉えて、〈夕暮を惜むごとくに〉とその心持を詠んだ句。澄みきつたその鳴き声にも一抹のものさびしさも感じられて、いかにも秋の蟬らしい。季題が見事に詠まれた句である。（葉）

筆者だけが感じているのかも知れないが、最近東京都心では結構蟬の鳴き出す時期が秋に食い込んできているような気がするのだが、何れにせよ成虫になってからは一週間程度しか生きられない

い蟬、しかも「秋の蟬」は一層しみじみとその姿が伝わってくるのである。秋の夕暮れの姿が目の前に迫ってくる。（廣太郎）

俳徒われつゞく残暑に逆らはず　たつの　浅井青陽子

青陽子氏の矍鑠としたお姿からとても九七歳という年齢は想像できない。八月には暑さにも屈せず、たつの市民俳句大会の重責を果たされた。今なお現役として経済界そしてたつの市の文化行事に貢献しておられる作者にただただ敬意を表するばかりである。社会的立場から立ち向かわなければならぬものもあるだろう。しかし、この句は「俳徒われ」と一俳人となった時、自然に心を開き、自然に逆らわず、自然の意のままに過している自画像なのである。自然を「残暑」に置き換えると敵しい「つゞく残暑」に諾う姿が写し出され、人生の達人の一駒を見せていただいた思いである。「残暑」ならではの余韻でなからうか。

（むつみ）

いつまでも続く「残暑」は、老若男女にかかわらずうんざりしてしまうものである。長い人生を歩んでこられている作者はこの暑さにも矍鑠と臨んでおられるのだろう。好きな俳句の道に御自身を託され、淡々とあるがままに歩まれている様子がかがえる句である。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

子選

虚子の前に浴衣の膝を揃へし日
 俳諧に余生を遊ぶ古浴衣
 深秋の人の腕を組みにけり
 碧といふ冷まじき字を遺したる
 雁の声此岸彼岸と渡りけり
 爽やかや人はやさしき息をして
 新涼の朝の間に発つひとり旅
 二次会はさらに高階月の秋
 木曜はおやつの出る日小鳥来る
 打晴れし娘の誕生日月今宵
 爽やかに刻山めぐり帯塚に
 帯塚の静かさ秋の日ざしあり
 鮎群れて落ち来るといふ川の雨
 十六夜の月に落ちゆく鮎ならむ
 花守の里と伝へて柿熟るる
 秋天ゆ天狗笑ひか伊賀越ゆる
 涼し気な距離を保ちて猫現るる
 病葉を看取のごとく拾ふ人

相模原 木村享史
 同
 明石 中杉隆世
 同
 大阪 佐土井智津子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 姫路 桑田青虎
 同
 福岡 松尾緑富
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同

こんな夜は雁渡るらむ能登を恋ふ
 稲光みづうみ全霊もて応ふ
 刻々と近づく一事秋立てり
 朝虹や故師の祝意と疑はず
 対岸の灯の乏しらに秋の湖
 透明も錦も秋の湖の色
 やがて消ゆ霧の煉瓦の館かな
 霧深し荘に近づく猿もなく
 指先が風放ちぬる野分かな
 芒の穂抜きたる悔いのやうなもの
 色町にしもたや暮し阿波踊
 暗きよりぞめきくるなり阿波踊
 またここに滝あり熊野古道往く
 山居していよいよふえし虫の声
 完結は次なる一步爽やかに
 これよりの長き夜よけれ虚子百句
 難波にも水室敬ふ祭あり
 うちのはの絵水室の水運ぶところ

神戸長山あや
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 秋田 浅利恵子
 同
 八尾 岩垣子鹿
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 徳島 上崎暮潮
 同
 たつの 浅井青陽子
 同
 神戸 山田弘子
 同
 後藤比奈夫
 同

天地有情句評

汀子

打晴れし娘の誕生日月今宵 姫路 桑田青虎

娘に対する情は名月のように明らかである。

爽やかに刻山めぐり帯塚に 福岡 松尾緑富

九州都府楼跡を訪ねて過去を引き寄せる秋の作者。

十六夜の月に落ちゆく鮎ならむ 東京 今井千鶴子

落鮎の姿まで明らかに照らす十六夜の月。

花守の里と伝へて柿熟るる 榎原 稲岡 長

由緒ある花を守り継いで来た里人に柿の熟れる頃となった。

涼し気な距離を保ちて猫現るる 東京 稲畑廣太郎

見るからに毛深い猫も距離を持つことで涼しげに見える。

虚子の前に浴衣の膝を揃へし日 相模原 木村享史

大切にしたい過去の体験を今に生かして。

深秋の人の腕を組みにけり 明石 中杉隆世

深秋の人、人生の体験豊かな人、作者の心のあり方。

爽やかや人はやさしき息をして 大阪 佐土井智津子

人生の達人への自分との関わり方。

二次会はさらに高階月の秋 長岡 安原 葉

さらに高階に臨む月の光に見えているもの、見えてくるもの。